令和 7 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策研究事業）「処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究」
（研究代表者 松本俊彦）
分担研究報告書

処方薬・市販薬依存症患者の入院治療プログラムの開発に関する研究

研究分担者　沖田　恭治
国立精神・神経医療研究センター 病院 精神診療部 第一精神科医長

【研究要旨】
研究目的：処方薬および市販薬使用障害患者を対象とした後方視的診療録調査の結果をもとに作成した入院集団精神療法のプログラム（以下、『処方薬・市販薬 FARPP』）を開発し、その効果を検証する。
研究方法：2024 年 11 月から 2025 年 12 月までに国立精神・神経医療研究センター病院の精神科病棟に入院し処方薬・市販薬 FARPP に参加した患者を対象に、患者背景や物質使用に関することを調査した。また、処方薬・市販薬 FARPP 実施前後で薬物依存症に関する心理尺度を用いた評価を実施し、プログラムの有効性について評価した。
研究結果および考察：28 名から参加同意を取得し、うち 19 名が処方薬・市販薬 FARPP の全セッションを終了した。参加後は薬物依存に対する自己効力感の向上、不安や抑うつの軽減、自殺念慮やその背景にある損なわれた所属感や他者に対する負担感の改善傾向が確認された。
結論：処方薬・市販薬 FARPP が、不安・抑うつ・孤独感・希死念慮などの、処方薬・市販薬使用障害患者に親和性の高い心理的問題の改善に寄与することを示す結果となった。外来加療が困難な治療抵抗性の患者に対しても、有効な治療選択肢となる可能性がある。

研究協力者
松本俊彦　国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部
石井香織　国立精神・神経医療研究センター 病院 薬剤部
齊藤友美　国立精神・神経医療研究センター 病院 精神診療部

A. 研究の背景と目的

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部が隔年で実施している「薬物使用に関する全国住民調査（2023 年）」（嶋根卓也 et al. 2024）によれば、解熱鎮痛薬や精神安定薬を使用する人たちは習慣的使用・過去 30 日間の使用ともに増加傾向にあり、違法薬物の生涯経験率は減少傾向にある。さらに、同部によって隔年実施されている「全国の精神科医療施設を対象とした実態調査」（松本俊彦 et al. 2025）によると、2024 年のある時期に最近 1 年以内の物質使用の問題を抱えて受診した国際疾病分類第 10 版（ICD-10）の F1 圏の診断基準を満たす患者の主たる対象物質の割合は、覚醒剤が 28.0%に対し、市販薬が 25.6%、医療機関で処方される睡眠薬・抗不安薬（以下、処方薬）が 22.6%と、合わせるとほぼ半分を占める結果となった。特に 2016 年以降の処方薬および市販薬の割合の急激な増加は、薬物依存症の対象が覚醒剤をはじめとする違法薬物など、乱用のために合成されていた物質だった時代が過ぎ去り、疾病治療のために流通している医薬品が対象物質である時代に突入し、遥かに身近な疾患へと劇的な変貌を遂げてしまったことを示している。

また、処方薬・市販薬を使用の対象物質とする患者群と、違法薬物を対象物質とする患者群とでは、属性の違いや自身の病態への理解にも差があるだけでなく、非犯罪化し若者の病気へと変容していることも、違法薬物を念頭に置いたこれまでの治療戦略が処方薬・市販薬使用障害患者にとって受け入れにくいことが示唆されており、精神科病棟での入院加療を要することも多い。本分担班では処方薬・市販薬依存症患者を対象とした入院治療プログラムの開発と、そのプログラムの効果検証を目的として研究を実施した。

B. 研究方法

研究の実施においては、厚生労働省の最新の「臨床研究に関する倫理指針」に準拠し、実施している。

a) プログラム開発

「国立精神・神経医療研究センター病院を受診した当該疾患の患者全例を対象とした後方視的カルテ調査」を立ち上げ、国立精神・神経医療研究センターの臨床研究審査委員会の承認を得て（承認番号：A2022-091）を実施し、処方薬・市販薬使用障害患者のうち入院を要する患者群の特徴を調査した。

2016 年 1 月 1 日から 2022 年 12 月 31 日までに当院の依存症専門外来を初回受診した処方薬および市販薬使用障害患者を対象に後方視的に診療録調査を行い、以下の情報を収集した。

- 主たる乱用薬物
- 乱用年数
- 各種薬物の生涯経験
- 性別
- 年齢
- 学歴
- 職業の有無
- 逮捕補導歴の有無
- 虐待・いじめ経験の有無とその内容
- 自傷行為・自殺企図歴の有無とその内容
- 精神科受診歴
- 精神科入院歴
- 身体疾患既往歴
- 精神作用物質使用による精神及び行動の障害以外の併存精神障害

「C. 研究結果」に結果の詳細を示すが、後方視的調査で得られた知見を参考にして、入院集団精神療法のプログラム（以下、『処方薬・市販薬 FARPP』）を開発した。テキスト作成にあたっては、患者属性の違いも考慮したが、元々、違法薬物やアルコール使用障害を対象として開発された従来の FARPP は、医師・看護師・作業療法士・精神保健福祉士・薬剤師など複数の職種が関与して運営されている。従来 FARPP と同様に、本テキストも計 4 回のセッション構成とし、

ファシリテーターをはじめ運営する医療従事者が処方薬・市販薬 FARPP を実施する際に抵抗なく使用できるよう配慮した。

コンテンツについては以下のポイントを重視して処方薬・市販薬 FARPP 用テキストを作成した。

① 処方薬・市販薬使用障害患者は高校卒業以上の学歴を有するケースが多く、また入院を要する患者は依存症を対象とした集団療法への参加経験率が高かった。このため、従来のテキストよりも情報量を増やし、ルビ（読みがな）は付与しないこととした。また、処方薬・市販薬の薬理学的特徴や効果・副作用についても詳細に触れ、患者が使用している処方薬・市販薬への理解を深められるような内容とした。

② 入院を要する患者は、外来で治療が完結する患者群と比較して、過量服薬による救急搬送歴、自傷行為・自殺企図の経験、精神疾患の家族負因、F3 や F4 などの併存精神疾患の診断、無職であること、依存症を対象とした集団療法（自助グループ含む）の参加歴があることが示唆された。このことから、物質使用の背景にある不安や抑うつ気分、生きづらさといった感情面にもフォーカスをあて意図的に共感的記述を増やした。

b) プログラム評価

「処方薬・市販薬使用障害の入院治療プログラムの評価研究」を立ち上げ、評価研究を実施した。実施においては、厚生労働省の最新の「臨床研究に関する倫理指針」に準拠し、かつ、国立精神・神経医療研究センターの臨床研究審査委員会の承認を得て実施している（承認番号：A2024-090）。

処方薬・市販薬 FARPP 参加した患者のうち同意の得られた患者を対象とし、以下の項目について調査した。

- 主たる乱用薬物
- 使用年数
- 薬物問題の重症度を評価する Drug Abuse Screening Test (DAST-20)
- 性別
- 年齢
- 学歴
- 職業の有無
- 虐待・いじめ経験の有無
- 精神疾患の家族負因の有無
- 自傷行為・自殺企図歴の有無
- 精神作用物質使用による精神及び行動の障害以外の併存精神障害の有無
- 精神科入院歴
- 学校教育内での薬物乱用防止教育歴の有無
- 自助グループ・治療プログラム参加経験

効果検証はシングルアームの介入研究デザインで行った。介入前後に以下の心理評価を行い、対応のある t 検定を用いて変化を検討した。

① 薬物依存に対する自己効力感
② 日本語版 SOCRATES (Stages of Change Readiness and Treatment Eagerness)
③ 対人関係欲求尺度 (INQ)
④ UCLA 孤独感尺度
⑤ 自殺潜在能力尺度 ACSS
⑥ ベック不安評価尺度 (BAI)
⑦ ベック抑うつ評価尺度 (BDI)
⑧ 短縮版自殺念慮尺度

C. 研究結果

a) プログラム開発：

「国立精神・神経医療研究センター病院を受診した当該疾患の患者全例を対象とした後方視的カルテ調査」

対象者

本研究の対象となった症例は男性 103 名、女性 121 名の合計 224 名だった。主たる対象物質による内訳は、処方薬 126 名（56.3%）、市販薬 98 名（43.8%）と市販薬が多かった。初診時に

処方薬と市販薬の両方を使用していたのは、38名（17.0%）だった。症例の平均年齢は 33.5（SD=12.68）歳で、男性 36.3（SD=12.68）歳、女性 31.1（SD=13.1）歳と男性の方が有意に高かった（t-test, p=0.002）。高校卒業未満の被験者は 43 名（うち高校在学中は 15 名）、高校卒業は 89 名で大学在学中は 16 名、大学卒業以上が 77 名だった。職業を有するものは 71 名（31.7%）、無職は 113 名（50.4%）、学生は 40 名（17.9%）だった。また、違法薬物の使用歴を有するものは 49 名（21.9%）であり、逮捕・補導歴を有するものは 33 名（14.7%）だった。

入院歴の有無による処方薬および市販薬乱用患者の比較

主にχ2 検定を用いて精神科病院入院歴の有無による比較を行った。

有意差がなかった項目

- 男女比：p=0.14
- 主たる物質（処方薬または市販薬）：p=0.37
- 慢性の身体疾患既往歴：p=0.42
- 違法薬物の使用の有無：p=0.66
- 逮捕・補導歴：p=0.55
- 併存精神疾患の診断：p=0.24
- 学歴：p=0.16
- 虐待・いじめ経験：p=0.06

有意差を認めた項目

- 過量服薬による救急搬送の有無：p<0.001
- 自傷行為・自殺企図：p=0.002
- 精神疾患の家族負因：p<0.001
- 併存精神疾患の有無：p<0.001
- 職業の有無：p=0.004
- 集団療法(自助グループ含む)参加歴: p<0.001

b) **プログラム評価**：

「処方薬・市販薬使用障害の入院治療プログラムの評価研究」

対象者

2024 年 11 月より 2025 年 12 月までに処方薬・市販薬使用障害の診断で入院加療された患者を対象にリクルートを行い、本研究参加について 28 名から同意が得られた。そのうち、全 4 回のセッションを完了した患者は 19 名であった。

同意が得られた参加者の主な使用対象物質は市販薬 18 名、処方薬が 10 名でそのうちいずれも使用すると答えたのは 6 名だった。平均年齢は 26.2（SD=7.68）歳で、男性 9 名女性 19 名だった。プログラム実施時の平均 DAST スコアは 11.6（SD=3.11）であり薬物問題の重症度は中等度～最重症と言えた。

26 名に物質関連以外の精神疾患の診断が下されており、精神疾患の家族歴があるものは 16 名だった。また、自殺企図歴があるものは 26 名で、縊首や身投げなど致死性の高い方法も目立った。

有職者は 10 名でうちフルタイムで働いているのは 4 名だった。中学在学中が 1 名、高校在学中が 3 名、高卒以上が 22 名（うち大卒以上は 8 名）で中卒以下は 2 名だった。逮捕補導歴があるものは 4 名、矯正施設入所歴があるものはいなかった。

教育機関在籍中に物質使用（薬物依存症）についての教育を受けたことがあると回答したものは 26 名で、SNS などを用いて物質使用に関する情報発信をしていると回答したものは 8 名だった。

家族以外でプライベートな相談ができる人数についての返答は、0 人が 7 名、1~2 人が 11 名、3~4 人が 7 名、5 人以上は 3 名だった。いじめを受けた経験があるものは 17 名だった。

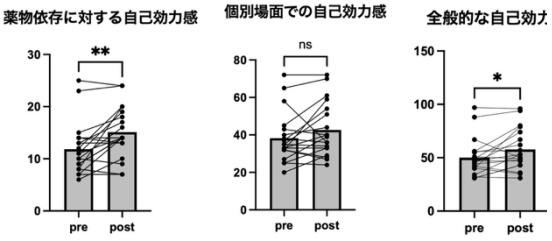
心理評価

対応のある t 検定で評価した結果、薬物依存に対する自己効力感（p = 0.02, 下位項目の全般的な自己効力感は p = 0.001）、対人関係欲求尺度（p = 0.03）、ベック抑うつ評価（p = 0.002）、ベック不安評価（p = 0.006）、および短縮版自

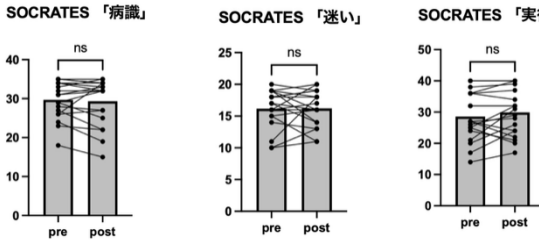
殺念慮尺度（p = 0.004)、において有意な変化が認められ、いずれの変化も治療効果があることを示唆していた。

各項目の変化について図示する。

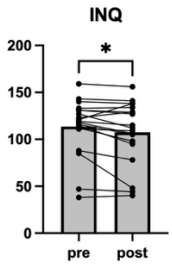
① 薬物依存に対する自己効力感



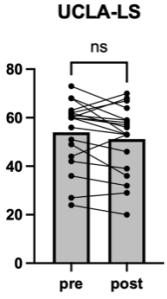
② 日本語版 SOCRATES (Stages of Change Readiness and Treatment Eagerness)



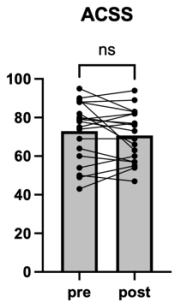
③ 対人関係欲求尺度（INQ)



④ UCLA 孤独感尺度

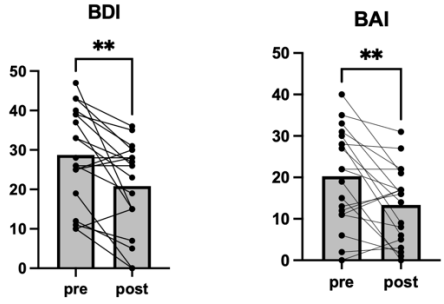


⑤ 自殺潜在能力尺度 ACSS

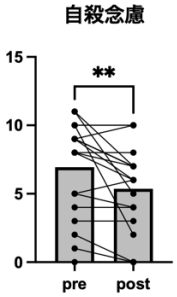


⑥ ベック抑うつ評価尺度（BDI）

⑦ ベック不安評価尺度（BAI）



⑧ 短縮版自殺念慮尺度



D．考察

後方視的カルテ調査の結果を踏まえ、処方薬・市販薬使用障害患者の入院治療プログラムである「処方薬・市販薬 FARPP」のテキストを作成し、プログラムを実施した。

作成したテキストについては、参加者から「過去のプログラムよりも話しやすいと感じた」「共感ができる話（を他患から聞けること）が多かった」「こういった話を家族以外にしたことがなかった」「外来でも同じようなプログラムをやってほしい」との意見が聞かれ、処方薬・市販薬使用障害の患者に対して少なくとも一定の親和性をもつプログラム内容になったと考えられる。

一方、「中学生にはハードルが高い」という声もあり、本研究にも参加があった中学生を含む思春期症例に対しては工夫を要することが示唆された。

処方薬・市販薬 FARPP に参加した患者の背景は、若年であり高卒以上の学歴を有するものが多かった。これは、全国病院調査や本分担研究内で実施した後方視カルテ調査と同様の結果であり、同様の患者背景であったことがわかる。併存する精神疾患の診断がされている者がほとんどであり、物質使用に関すること以外にも精神的問題を多く抱えていることが示唆される。若くても依存症の重症度としては高い患者であることから、処方薬・市販薬を使用してから比較的短期間で物質使用障害に至っていることも考えられる。

薬物依存に対する自己効力感スケールは、得点が高いほど薬物への欲求が生じた時の対処に自信または自己効力感を持っていることを意味し、上昇傾向であったことから処方薬・市販薬 FARPP により薬物欲求への自己効力感が高まった可能性が示唆された。

また、BDI や BAI の平均値も有意な低下が見られ、不安や抑うつ症状の軽減が確認された。自殺念慮や孤独感も改善傾向が見られ、負担感の知覚と所属感を測定する INQ の値も改善傾向であった。

処方薬・市販薬 FARPP に参加し、医療従事者とともに処方薬・市販薬について学び、自身の感情や行動を認知し、同じ問題を持つ当事者と経験を共有したり共感したりすることで、孤独感が薄れ所属感が高くなることが考えられる。また、それに付随し、物質使用の背景にある不安や抑うつ症状の改善、自殺念慮の改善、最終的には物質に対する自己効力感が増加する可能性がある。

E. 結論

入院を要する処方薬・市販薬使用障害患者の特徴を後方視的カルテ調査で評価し、そこで得られた知見を用いて作成した処方薬・市販薬 FARPP が、物質使用の制御に対する自己効力感を増加させるとともに、希死念慮や抑うつや不安といった心理症状の軽減にも有効であり、外来加療が困難な治療抵抗性の患者に対する有効な選択肢となる可能性が示された。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

1) 石井 香織, 沖田 恭治ほか. 最近 7 年間の診療録調査に基づく処方薬・市販薬使用障害患者の実態分析. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 60(2) : 77-87, 2025. 号, 77-87, 2025 年 12 月.
2) 沖田 恭治. 【中学生を診よう−一般精神科医における中学生診療の基礎知識−】中学生の物質使用症 オーバードーズに関する臨床的考察. 精神科治療学 40(11) : 1212-1216. 2025 年 11 月
3) 沖田 恭治. パニックと不安 対象ごとの理解と工夫 パニック発作/パニック症と物質使用症 こころの科学. 2025 年 9 月 ; (243)
4) 沖田 恭治. 第 2 特集 市販薬のオーバードーズ 市販薬オーバードーズと向き合う 依存症専門医療機関における市販薬使用症の治療 治療. 2025 年 7 月 1 日 ; 107(8) : 1032-1035
5) 沖田恭治.精神科疾患に対する向精神薬のオフラベル使用を考える 物質関連障害に対する薬物療法とオフラベルユースについて 臨床精神薬理.2024 年 12 月;27(12):-
6) 沖田恭治.物質・医薬品-1.依存性物質 3) 鎮咳薬・総合感冒薬 精神科治療学.2024 年 10 月;39(増刊):-

7) 沖田 恭治.【精神疾患・精神症状にはどこまで脳器質的背景があるのか-現代の視点から見直す】物質使用症の脳器質的背景 精神医学.2024 年 4 月;66(4):412-417

8) 杉原有希, 山中恵里子, 村上真紀, 沖田恭治, 武村尊生, 松本俊彦, 山口重樹.多施設,多職種の連携によりオピオイド使用障害から脱した症例を通して考える本邦におけるオピオイド使用障害への対応の問題点 日本サイコオンコロジー学会総会(Web).2024 年;37th():-

9) 沖田恭治.実態調査と臨床現場から紐解く市販薬使用の問題 日本精神神経学会総会プログラム・抄録集.2024 年;120th():-

10) 五十嵐俊, 沖田恭治, 林大祐, 野田隆政, 鬼頭伸輔, 鬼頭伸輔.Long COVID に続発した大うつ病性障害(MDD)に対する反復経頭蓋磁気刺激療法(rTMS)による炎症性変化について:症例報告 日本うつ病学会総会プログラム・抄録集.2024 年;21st():-

11) 沖田 恭治.【アディクションとその周辺】アディクション総論 アディクションの発症機序と病態を説明する理論 ドパミンを無視してアディクションを理解すること勿れ 報酬系とドパミン神経伝達について 精神科治療学.2023 年 10 月;38(増刊):44-48

12) Hiroshi Matsuda, Tsutomu Soma, Kyoji Okita, Yoko Shigemoto, Noriko Sato. Development of software for measuring brain amyloid accumulation using 18 F-florbetapir PET and calculating global Centiloid scale and regional Z-score values. Brain and behavior. 2023 年 7 月;13(7):e3092-.

13) 林 大祐, 五十嵐 俊, 山崎 龍一, 松田 勇紀, 松尾 淳子, 稲川 拓磨, 川上 裕, 沖田 恭治, 藤井 猛, 野田 隆政, 住吉 太幹, 鬼頭 伸輔. 磁気けいれん療法(MST)により寛解した高齢者うつ病の一例 精神神経学雑誌. 2023年6月;(2023特別号):S408-S408.

14) 林 大祐, 五十嵐 俊, 山崎 龍一, 松田 勇紀, 松尾 淳子, 稲川 拓磨, 川上 裕, 沖田 恭治, 藤井 猛, 野田 隆政, 住吉 太幹, 鬼頭 伸輔. 磁気けいれん療法(MST)から電気けいれん療法(ECT)に切り替えた高齢者うつ病の一例 精神神経学雑誌. 2023年6月;(2023特別号):S409-S409.

15) 松尾 淳子, 林 大祐, 五十嵐 俊, 松田 勇紀, 山崎 龍一, 稲川 拓磨, 川上 裕, 沖田 恭治, 藤井 猛, 野田 隆政, 住吉 太幹, 鬼頭 伸輔. 精神疾患へのニューロモデュレーション療法のための探索的マスタープロトコル アンブレラ・バスケット試験 精神神経学雑誌. 2023 年 6 月;(2023 特別号):S696-S696.

16) 沖田 恭治, 松本 俊彦.【精神科医療の必須検査-精神科医が知っておきたい臨床検査の最前線】物質およびアルコール使用障害の診断・治療において望まれる対応と検査 精神医学.2023 年 6 月;65(6):891-898

17) 沖田 恭治.【感情の力 コントロールと言語化を超えて】臨床実践における感情作業 アディクション診療において感情を扱うことの難しさ アレキシサイミアとの関係 精神療法.2023年4月;49(2):207-211

18) Yoko Shigemoto, Noriko Sato, Norihide Maikusa, Daichi Sone, Miho Ota, Yukio Kimura, Emiko Chiba, Kyoji Okita, Tensho Yamao, Moto Nakaya, Hiroyuki Maki, Elly Arizono, Hiroshi Matsuda. Age and Sex-Related Effects on Single-Subject Gray Matter Networks in Healthy Participants. Journal of personalized medicine. 2023年2月26日;13(3):-.

19) Yehong Fang, Yi Liu, Ling Li, Dara G Ghahremani, Jianhua Chen, Kyoji Okita, Wenbin Guo, Yanhui Liao. Editorial: Community series in neurobiological biomarkers for developing novel treatments of substance and non-substance addiction, volume II. Frontiers in psychiatry. 2023年;14:1134561-1134561.
20) Hiroshi Matsuda, Tsutomu Soma, Kyoji Okita, Yoko Shigemoto, Noriko Sato. Development of software for measuring brain amyloid accumulation using 18 F-florbetapir PET and calculating global Centiloid scale and regional Z-score values. Brain and behavior. 2023;13(7):e3092-.
21) Daisuke Hayashi, Shun Igarashi, Ryuichi Yamazaki, Yuki Matsuda, Takuma Inagawa, Yutaka Kawakami, Kyoji Okita, Takamasa Noda, Tomiki Sumiyoshi, Shinsuke Kito. Magnetic seizure therapy for depression in the very elderly: A report of two patients in their 80s Asian Journal of Psychiatry. 2023;90: 103806- 103806.
22) Shun Igarashi, Kyoji Okita, Daisuke Hayashi, Ryuichi Yamazaki, Yuki Matsuda, Takamasa Noda, Koichiro Watanabe, Shinsuke Kito. Neuroinflammatory Alterations in Treatment-Resistant Depression Secondary to Long COVID by Repetitive Transcranial Magnetic Stimulation (rTMS): A Case Report Psychiatric Research and Clinical Practice. 2024;6(2):63-64.
23) Takashi Usami, Kyoji Okita, Takuya Shimane, Toshihiko Matsumoto. Comparison of patients with benzodiazepine receptor agonist-related psychiatric disorders and over-the-counter drug-related psychiatric disorders before and after the COVID-19 pandemic: Changes in psychosocial characteristics and types of abused drugs. Neuropsychopharmacology reports. 2024;44(2):437-446.
24) Kaori Ishii, Kyoji Okita. Potential effect of ketamine in treatment for dextromethorphan use disorder exploding in Japanese young population. Asian journal of psychiatry. 2024;99:104164-104164.

2. 学会発表

1) Kyoji Okita, Noriko Sato, Yukio Kimura, Yoko Shigemoto, Mitsuru Syakadou, Yumi Saito, Toshihiko Matsumoto: Amyloid PET and diffusion kurtosis imaging for alcohol use disorder: a multimodal study. The College on Problems of Drug Dependence (CPDD) 85th Annual Scientific Meeting, Colorado, 2023.6.20.
2) 沖田恭治，喜多村真紀，岡野宏紀，齊藤友美，嶋根卓也，松本俊彦：(ポスター) 物質使用障害を取り巻くスティグマを惹起・持続させる言語表現に関する質的研究. 2023年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.14.
3) 沖田恭治，佐藤典子，木村有喜男，重本蓉子，釈迦堂充，齊藤友美，松本俊彦：アルコール使用障害を対象としたアミロイド PET/拡散尖度画像 MRI 研究. 2023年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，岡山，2023.10.15.
4) 石井香織, 沖田恭治, 船田大輔, 勝海学, 松本俊彦：(ポスター) 国立精神・神経医療研究センターにおける市販薬使用障害患者背景の後方視研究. 2023年度アル

コール・薬物依存関連学会合同学術総会, 岡山, 2023.10.15.

5) 「ダメ」「ゼッタイ」という表現が違法薬物の使用経験を有する者に与える印象について 喜多村真紀, 沖田恭治, 岡野宏紀, 嶋根卓也, 松本俊彦　第45回全国大学メンタルヘルス学会総会 2023.12.21.

6) 沖田 恭治, 松本 俊彦, 齊藤 友美, 重本 蓉子, 佐藤 典子、パーキンソン病治療薬を用いた覚醒剤使用障害の薬物療法開発を目指した脳機能画像研究:中間解析、2024年度　アルコール・薬物依存関連学会 合同学術総会、東京、2024/9/19、ポスター

7) 石井　香織, 沖田 恭治, 齊藤 友美, 吉澤　一巳, 松本 俊彦、処方薬及び市販薬使用障害患者背景の縦断的調査研究（第１報)、2024年度　アルコール・薬物依存関連学会 合同学術総会、東京、2024/9/19、ポスター

8) 沖田 恭治、実態調査と臨床現場から紐解市販薬使用の問題、第120回日本精神神経学会学術総会、札幌、2024/6/20、口頭（シンポジウム）

9) 石井 香織, 沖田 恭治ほか. 処方薬・市販薬使用障害に関する縦断研究. JHリトリート2025.

10) Ishii K, Okita K et al. Change in attitudes towards addiction treatment among individuals with legal substance use disorder in Japan; CPDD 87th Annual Scientific Meeting. June 2025

11) Saito Y, Okita K et al. Comparison of substance use disorder patients' psychological characteristics in Japan: methamphetamine vs. dihydrocodeine vs. benzodiazepines; CPDD 87th Annual Scientific Meeting. June 2025

12) 石井 香織, 沖田 恭治ほか. 処方薬・市販薬使用障害患者の心理的特徴. 日本アルコール・アディクション医学会, 2025.

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 引用文献

嶋根卓也, 水野聡美, 猪浦智史, ほか (2024): 薬物使用に関する全国住民調査（2023 年）. 令和 5 年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「薬物乱用・依存状況の実態把握とのための全国調査と近年の動向を踏まえた大麻等の乱用に関する研究（研究代表者：嶋根　卓也)」分担研究報告書：pp8-156.

松本俊彦, 宇佐美貴士, 沖田恭治, ほか (2025): 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査. 令和6年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究（研究代表者 嶋根卓也）総括・分担研究報告書：pp99-154